

「この温室は美しい。」

「そんなことは知っている。」

「だから毎日水を遣ったりして、大切に世話をしているのですね。」

「毎日水を遣って大切に世話しているから美しいんだ。」

「僕は今日初めてこの場所を知ったんです。」

「私も今、ここが美しい場所だって事を知ったんだ。」

「つまり、ここは毎日いつも新に在って、いつも新に美しいんですね。」

「いや、ここは毎日いつも既に在って、いつも既に美しいんだ。」

私がこの温室を初めて知ったのは、今年の7月のことである。確か台風が過ぎ去った次の日であったと思うが、その日も、今まで何度も訪れた桐生の街を歩いてきた。まるで無限に広がる何か巨大な身体の毛細血管を流れる血液となつて、その体内の隅々まで旅している様な、どこまでも入り込んで、そこを初めて訪れたように感じつつ、一方で、前にも訪れたことがありその場所をよく知っているような、その両方の感触を持ちながら。(血液は体内を循環しているのだから、体内の全ての場所は初めての場所であり、且つよく知っている場所なのは当然かもしれない。つまりその時の私にとって、街という体は、どこまでも無限の広がりであると共に、既にその全体をよく知ったひとつの有限でもある。)

そんな時、ふとその事に疲れて山に登ってみた。水道山と呼ばれるその山の中腹には、名前の通り幾つかの貯水池がある。山中を巡る遊歩道を歩いて登り、山頂近くの尾根に広がる公園に出ると、そこから街全体を見下ろす事が出来ることに初めて気付いた。丁度この山の後ろに陽が沈みかける頃で、前景となる山の斜面の樹々は深い影の内に沈み、その遥か下方に、台風によってくもりを全て拭き払われたような澄んだ空気を透して、街がいっぱいに夕陽を反射させている。ここから見ればさっきの貯水池の水面と一緒に(コンクリートの蓋が見えなかったが)、街はひとつの平面上に広がっている。

ただ今日は特別の日なのだろうか、ものすごくクリアーだ。だから細部までよく見える。よく見ると街は全然平滑な面じゃない。とても入り組んでいる。どこまで細かく見ても光と影が互いに絡み合い、せめぎあっている。ここから見ていると、最後には光と影の粒子が音にならない音を立てながら摩擦し始める。目に心地よい振動が伝わってくる。空気があまりに澄んでいて、まるで本当に小さな街がそこにあつて、手を伸ばせば、ざらざら、さらさらとその表面を撫でることが出来るようだ。

そのあと、さらに山のなかを歩いて、隣の吾妻公園に迷い込んだ。ここも初めて来る場所だ。さっきの水道山公園と違ってここは山の中腹、谷に入り込んだ奥まった場所にある。だから街を見渡すことは出来ないけれど、そのかわり街からもちょっと隠された感じがした。斜面を段々に切り開いた幾つかの小さな平地に、池や花壇や東屋が配されていて、手入れの行き届いた感じがする。

その何段目かの平面上に、尾根の斜面を背に山に包み込まれるようにして、この美しい温室はあった。